

Inches

1 2 3 4 5 6 7 8

Centimetres

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

Kodak

LICENSED PRODUCT

Blue

1

Cyan

2

Green

3

Yellow

4

Red

5

Magenta

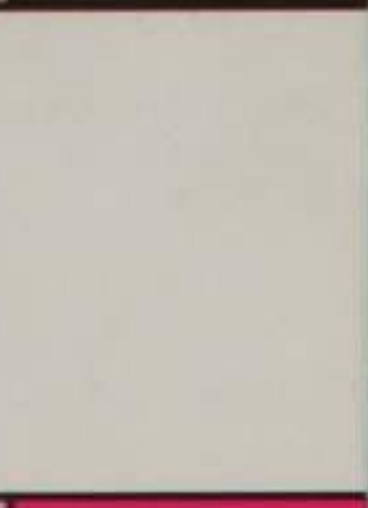
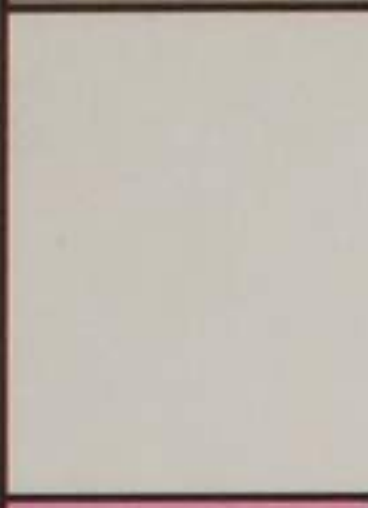
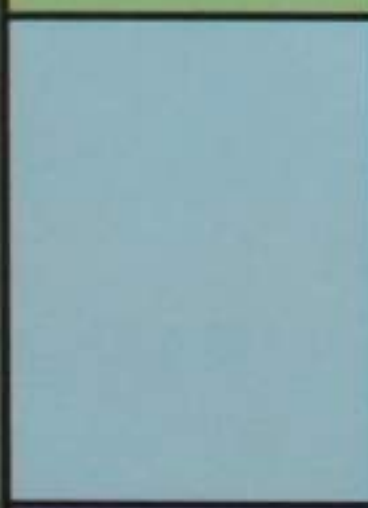
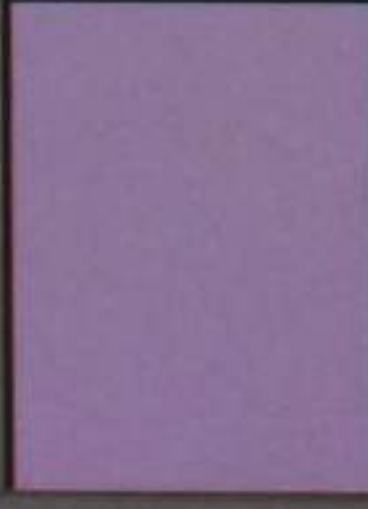
6

White

7

3/Color

Black



A 1

2

3

4

5

6

M 8

9

10

11

12

13

14

15

B 17

18

19

KUAIWA HEN.

PART III,

JAPANESE TEXT.

EXERCISES XV—XXV.

洋学文庫

文庫 8

C 763

2

0

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1

2

3

4

5

6

7

8

9



第十五章

睦侯氏曰茲書

一 新年此也祝儀を申上まはて 明

まゝて吉春よ此座い百は 二 此同振

小此目出度此座いまはと叔回此八種

ハヤ何卒相変もまはと 是誰このた食

春秋 曾古篇

十一 在 第

積つみを持もて来こい ③ 是こゝハ耻はづまらぬ座ざ

いまのとのお年とし玉たまのち道みち ④ 陸りく町ちやう

寧ねいよあ難がた有あり座ざいりまさアま先まくく此こゝ

処ちへい何なん卒そつ態たいとと屠と蘇そをを一ひと献けん ⑤ 毛もうウ

おお構かま被ひ下さままととれれ必かな何なん卒そつ ⑥ サさアあ ④

雜ざ煮しのの醒さめままととのの箸しやくををおお取とりとて

つつてて下くだ ⑦ 重おもくく以もちち馳ち走そうでで座ざのの力ちから

以もち ⑧ 時ときにに諾だくなないい事ことををおお話わ申まを

指さででままのの二ふた日にちにに晚ゆふにに室むろ船ぶねのの繪え

図ずをを枕まくら乃すなはちち下くだへへ入いてて其そのむむんんのの夢ゆめ城じやう

占満よこの彼ハ何言意味で此煙

いよりよと九左招サ何だの空れ事て

らる昔ゆらの例でとくらた招

やりよりよと十私も何も馬鹿ら

く思ひよりよと乍然吉夢をえんと

其年と運ぶ良と言よりよと一富

士二鷹三茄子とこの言よりよとを見て

大名よりよと成しよりのでよとハハア 十一

イエ其招な笑談を止て十一日よは

あ承知の通具足開で何卒一献獻

ト度たいから水みづを願ねがふこと ⑤ 雞あひあり

其そ処こで初はつ卯ぼも何なに日ひで水みづ産うまること

⑥ 工たくし、燧たい八やう日ののと思おもふこと ⑦ 其そん

水みづら此こ年としハ惠めぐ方かたも彼あつ処ちたら

兩りう方かた兼あること水みづ回めぐ道みち後ごませ其そ代しろ

十一日じゅういちにちハ水みづ断たぎりて乃すなはち ⑧ 其そん

日ひにも何なに卒そつ願ねがふこと先まづ今いま日ひハ他ほか処ところへ

も年とし始はじま廻めぐりて成なること ⑨ 其そん

亦また何なに伺うかがふこと ⑩ 乍あ然ら只ただ今いま萬まん歳さいの

参まゐりてた水みづ日ひ振ふに童どう蒙もうの氣きは成なること

見物致せしむらばやあやうき人の世

道外て居て慮外陽気れ物でま

左指ゆら其もねん致て矢もま

何も面白太夫より木藏の方の

却る上手だを極楽せよと

吉報延くを致すた旨法又速失

禮でお座いよとこの急をよと

右指でまら其ゆらハ日には是非窺

ませしむらばやあやうき人の世

第十六章

● 賴たのむませし ● 誰たれ何れ ● 鶴つる澤は松は右は

澤は門もんでの座ざいままと此ちのた目め通とを願

度たておましてまのあ主も人んもお在ざ

宿しゆくで在しやいままのあ ● 四よへい此こ処ち

一いおお通と下かまし主も人ん一い中ちゆう聞もんまし

一いのら ● 五ごヤレハ ● 鶴つる沢は氏し能のうくをサアク

何なに卒そつ直ちよくハ奥へ ● 六ろく先せん日じつハ実ハお構かま

中ちゆうませんで何なにもハヤ其節せつも別死して

おお歳さい王わうを難有あ座ざいました ● 七しちイエ

色いろくお馳ち走そうに預まして私こを却かへ

て今こん昭しやうハ絃せん亦あつ早はや亦あつ出で楫しやくをさいま

した 八はち兼かね而て亦あつ約やく束そくれ初はつ卯めうであ

座ざいいももととああらら亦あつ同どう道だうで参さん詣ぎいた

もせもろろ 九く何なん卒そつ亦あつ一いつ処じょは私わたくしもも使しを

樂たのしみで居ゐりりしたたの乍あつ然ぜん未ま進しん子しの亦あつ

産ざんいいももせせろろ 唯ただ今いま諾だつらん物ものととヤや

付つききたた一いつ寸すん一いつ盃はいやつつて参まりりももせせろろ

十じゆイい工こう其そのも折せつ角かく乃の何なんででもものの歸かへら

ててののらら亦あつ弛ちををに成なりりりももせせろろ 亦あつた

春はるは氣け色しきを十じゆ分ぶんは見けん物ぶつ為なるる

成なるたけ早はや出で掛かませうぢやご座ざい
 ませんの①何なんでもご出で随ま意いに致し
 ませう私こゝろに支た度たハご能よく座ざいをと
 このら直ただにおお供く致ぢませう②ア、
 今日こんにちハ良よ天てん気きだのら津つ浪なみ人ひと形かたちい

マアま参まゐ詣ぎの人ひとれ多おほき③方かた振ぶさ
 歩あ行ゆハ邪よ魔まで却かへて餘あま何なんだのら
 外あ方かたの道みちを新まやませうの④何なん世よ
 間かん不ふ残ざん参まゐ詣ぎハごままとら何なんも
 も込こ合あまませう⑤ヤア向むかひの方かた万ばん年ねん

龜之助の参るまで定て糸倍して

海で魚産いませう 夫イヤ是ハ何

放もお揃で能今日もママ私も

唯今帰で魚産いませうこの何も大

妻の人でトント歩ません 屯

此処らでさへお揃で込合ません

扱で魚産いませうママ徐く糸ませう

夫 夫扱なら魚産成さ 夫 成程萬

年氏ご言通剛依れ人だ土産此

蘭王を賞と思おませうの賣切たと

みえてお産いりきん 世 アレく彼処

二二三本持て居振子ごころ 昇行

て買ませく 世 ヲイ此蘭玉ハ何

程だ 世 一両でお産いりきん 世 剛

後子高直一分子負 世 檀那モウ

二朱お下残物でいりけさせく

世 途方をいりお産いりけさせく

程の者併一分二朱いり買ても

宜二本呉れ 世 時子モウ七時過

だのら徐く歸とくさせく 世

春秋會言篇

十六卷

九

成程何処をで一盃飲と、思たか

遅成たやう内へ函てやりりるき

● 難者此症いりるまこの併此気の毒

であ症いりるま ● 何とせ何時

を私一人でも一盃やらこの

まよとやう尊君のお出たくと下度淋

舗をて却て私こそ其代よハ本

の有合で何ともあ症いりるま ●

何致やして併其影らあ馳走られ

りやせしこの

第十七章

一 喜三郎 手あは 未話れかつたの急
 なあ用を仰極て来月五日はも大坂
 へお立ち渡さぬくてハ成ぬハテ 二 其
 での道中れお支度等々其時追小

取揃すてハ成おはるハ 三 勿論れ事
 さ就てハ手前ハ是非連て往後たお
 宿場継立等も 能気を附て呉るこの
 宜 四 畏まゝしたあ荷物ハ何位急る候
 五 方招サマア予この乗引戸駕籠一

挺本馬一疋輕尻一匹兩掛二荷其

位代物だ 六 せら 明荷たけ買て

あ掛ハ古のを繕振よ致せし 七

其様な事と何ぞも手前此の

宜 八 先ぬき申此品も出来振し

た是のら荷作を致せし 輕尻此

方は松等の荷物とる君の夜具を

附ませし 旅店の夜具の着れし

のら 九 宜いマア其で支度とモツ調

た出立ハ明朝七時だより 先觸い

出たらうナア ⑩ ハイ先刻出た

人豆や馬形どと少時目よ八半

時と申附アセウ ⑪ 是人豆モウ

荷も了る解て仕舞たの然而

かす就不其形に揺てハ宜形ハ宜氣

を附がウ ⑫ 是宿役人昨日の先觸

れ通人足不残扱て居の工御制度通

賃錢を拂のら此駄賃帳へ書止て

られろ ⑬ ハイ畏まうた

通出記 ⑭ ナゼ人豆ハ駕

籠を揚ぬいのふ然る小荷鉢を早く

付すのへいと辨言て先刻のら

何志ちんだ是此方等ハ日輪れ有

内止宿へ着ぬいちや集らん 五モシ

檀那今日の實は骨を折すて

よのら少く酒代を何卒誠より兼

あゝこの 六 蠢漢メイ 立場斗為

て居癖は厚々間を酒代を無物

だ殊に此方等も御用道中た馬

麻ア言れ 七 宿役人モウ人豆ハ揃

て居ゐのの大大へイ先先觸ふ通と人人足足
 ハチヤント先先程程いいら其其人人足足出出荷荷物物
 を速速先先此此宿宿でハ大大は手手廻廻の宜宜て
 能能世世私私どもハ當當宿宿役役人人で出出座座
 いいまよとこの出出案案内内は罷罷出出すして出出

座座いいまよと出出旅旅宿宿ハ出出本本陣陣の差差合合よそ
 無無據據脇脇本本陣陣よそ出出勘勘辨辨を何何卒卒併併
 出出差差支支の出出指指は付付置置ました世世
 其其も仕仕方方の出出熱熱何何も免免もあれ案案
 内内をよとるの宜宜世世この宿宿が其其で

以座いすま **其** 子亭主奥座舗り

奇癖れ處を檀那れ居間子

為振又然して万事疎略の有而

者濟ぬを絨氣を解て **西** へい

家内此りの少を皆能言付てハ

置ま〜たけれども行届ません処ハ

以差図を互委何卒以風呂も先刺

ころ漣て居まをのり以上へ以窺下

ま〜 **其** 唯今窺たら直に召さる

だのり絨不都合れ無振は然つ而

餘熱過あつりあつのハた嬉きらひだころノオ適宜あて
 加減かへんを頼たのを共沙湯さゆが減ました
 ら直子と膳ぜんを差上さありて宜鋪よろ
 赤せ産ざんいやまての世今いまは此処こゝから沙
 汰たを為り其迄までハ控ひかて居ゐる空

共共是これモウも沙膳さぜんを上るも宜よろから
 直ち子と堯ぎょうヘイへい沙膳さぜん半はんで宜鋪よろ沙産さざんい
 やまての其その以も前まへは沙酒しゆも如何いかで
 沙産さざんいやまての世何なにハ旦那たんハ下戸げこで
 つらつらゆるから沙酒しゆハ此も召上よ

ぬい併拙者ハ少ク用カラノオあと
 で此処へ許し一銚子をつけて来て
 くんれ乍然是ハ檀那子内證だか
 ら其積で世其も委細吞込で居る
 之世是ハ膳もモウ海だのうら後で

良貴花を上る振子序子宿役人を招
 で貫度世へイ恰忝て居る之のうら是へ
 招ませる世へイ何の用で此座ハも之世
 ン、餘法依でもぬいの明日且那ハ挑
 燈引子立子成のうら其會で萬子

左支那の扱子被の宜殊よお駕籠人

足ハ絃慣た者を擇で貫度毎度且

那も乗嫌と仰付て後の宿等てと

以困却たのら随分良人足は揃扱

宜氣を附て 興へいゝ當宿でい欠

出者形とい遣ません他の宿とは

違まゝて駕籠人足等ハ殊よ吟味と

渡者をつひひるまやら其儀ハお心

配よえ及ません 世喜三郎人足ハ

揃たら並み出立に被さゝ 世只今

子申上まうしあみのよと少すくく以も待まち下くだおるおると

以も兩掛りょうかけの人ひと足あしの懸かて居ゐるるよとこの職しやく

心こゝろの以も駕籠かごの人ひと足あしの獨ひとり不ふ足そくで以も

座ざいいままととから ④ 宿しゆく役やく人にん何なにした物もの

だ昨夜さくやああれ裡ところ談だんとて置おたたよ困くる却かへ

ぢやぬいぢやぬいの持もち人ひと足あしが揃そろぬいぬいのこの異けからん

一ひと躰たゝみ御用ごよう道中だうちゆうを何なんと心得こころえる ⑤ 平ひら恐おそ入いり

ままとてお座ざいいままとへい唯ただ今いまも急きんに

催促さいそく被ひままととたたの何なにももや實じつ

に ⑥ 何なにだだくく人ひと足あしの参まゐたたの ⑦ へい

漸^や参^りつて^い座^ざい^るを^い何^か卒^そお^か上^か
へ^た振^り上^りま^す一

第十八章

●喜^き三^{さん}郎^{ろう}先^{せん}達^{だつ}る^に道^{だう}不^ふ種^{しゆ}々^くお^ど
苦^く勞^{らう}だ^らた^ら死^しで^い亦^{また}少^{せう}用^{よう}が^あ出^で来^きて

京^{きやう}都^と迄^{まで}往^{やう}ぬ^らく^らち^や旅^{りょ}な^らい^の何^が
を^た度^びく^き振^り許^り遣^は振^りで^い氣^きの^い毒^{どく}だ^ら
実^{じつ}に^た他^たの^の都^とぢ^や間^まに^あ合^あぬ^らい^のら
今^{いま}度^ども^た大^{たい}儀^ぎぬ^らぐ^ら又^{また}一^{いつ}所^{しよ}に
へ^い何^{なに}仕^{まつ}ま^すて^い其^{その}者^{もの}何^{なん}返^{かへ}で^いを^い御^ご

供ハ厭いやませんんのある君きみこそま誠まことふま

難かた係がでいつつ〜いままとと弥や張ちやう張ちやう

用もち道みち中ちゆうでまどど座ざいるままととの三何なに今いま

度どハ自みづか分わかれ用もちでま其その急いそのいそ旅たびで

もれ〜なむむらら所ところ々々れれ名な所ところ古ふる跡あと

等らをを財さい物ぶつ〜と思おもふふ其その者もの

トンカカ面おもて白しろ座ざいませせ〜ま其その處ところでで

荷に物もののの攸しハハ五ご何なに両りやう掛かけ一いつ荷にササ只ただ着き

替かのの二に三さん枚まいをを持もてて往い者しや互まんんだだ然ぜん

〜と細こ代しろれれああ掛か〜や柳やなぎ篋けつは

西掛の方が宜うら其それを取とり来き

てらん胤いん替か子ごの工く合あひの悪わると

いひんいんから能よ氣きを付つてノオ **六**

ハイ栲やく栲かくの兩りやう掛がをを買かつて参まりま

た西せい覧らん下げ **七** 是これも妙まうく玉たま極ごく

替か子ごれ機き會あひを儲あつ通とだ大たい體たい持ち

て往わう不ふも揃そろて置おいたらら諾だく斗たう小せう

成なりて居ゐる人人ひと足あを一人ひとり明あ日ひの

船ふね来き揃そろる船で来きてらんな **八**

左ひだり指さし形かたちらお出い出で立たひ強明めい朝あで

亦産いまゝしての 九ニマア往る知道

行て泊と為す十其やら

人を頼で置て其の私も

支度おのちに買物を發

たりして參度亦産いまして十

宜く是れやら勝手は自分に用

を足して明朝に出立の支度

ともるが宜し 十一難有る産いのま

もた尤も往て參まして 十二

旦那人足のまありましては

このあし掛を虫ませり
⑤ 子イ子

衣恰支度お出来た扱出掛ヨ

ウ
⑥ 今日ハ天氣お織ておあ立

もも至極結構でお産いませ
⑦

昨晚の扱子ぢや曇て居たお

仕合よお氣を拵た子、彼是

為中モウお川駄だ相對で人

豆を頼が宜
⑧ 子イ宿役人お

對拂だお人豆を一人河峯を虫

ぶくんれ
⑨ へイ畏おした壹

貫五百ひやくごでああ産さんいいるるはは其そのでで宜よろ

いいらら速すみ人ひと足あしをを出だせせ世よへへイイ此こ

都みやこのの出で荷に物ものをを擔かぎぎままはは人ひと足あしでで

出で産さんいいままはは世よんん、速すみ揚あげげろろくく

世よ土つち三さん三さん三さんのの昼ひる食くのの萬ばん年ねんややにに為な

よよのの其そののの宜よろ敷しく出で産さんいいままはは

世よ才さいやや世よ入いままはは透すてて居ゐるるままはは

いいらら直ちかとと奥おくののああ座ざ敷しくへへああ通と

法はふ成せいままはは世よ姉あねササンン照あけけ那な以もてて晝ひる

食くをを遊あそぶぶいいらら何なにのの見み繼つぎぎてて判だ

てらんれ品を吟味しつ然

酒を少頼（共）ハイ畏（かこ）した（共）

ヲイ妹サン何した未か工成丈

孫急（共）から（共）ハイ詠（おあ）おでさ

あした（共）ヤア是ハ結構（共）彼

名物此海苔を出してらんれ

酒の肴よハ至極（共）喜三郎（共）

遠慮水しよ今些飲（共）難有（共）

お産いもよモウ十分頂戴（共）

ましてよ先ハ免を蒙てお

膳を頂戴度お産いませ世サアク

不揃い今些何の取らうこの世

イ、エモウ澤山でお産いませ世

ヤア銚子切だお積りしてマア

も一所は喰ヨウ盛てくんたな世

如さん良茶を入れて来てた

くれ序は勘定の出解を世へイ

お書付でお産いませ世ン、二分

二朱と三分五分の其分は是で

取ナア是も少許だお茶代だ世

膳を頂戴度お産いませ世サアク

不構は今些何の取らうこの世

イ、エモウ澤山で少産いませ世

ヤア銚子切だお積りしてマ了

喰ヨウ盛てくんたな世

ヲイ妹さん良茶を入れて来てた

くれ序は勘定の出解を世へイ

お書付で少産いませ世ン、二分

二朱と三分五分の其分は是で

取ナア是も少許だお茶代だ世

難有西産いよと亦此物を待

申上まうす **四** 是人豈檀那だんなの

立たり成なりしる存ぞを揚あげり然さる如何

だ貸か銭せんを増ますの神奈川迄手

あめ産まに擔かいで行いちや **四** とうう

海産かいざんいまと遣やります **四** 旦那神

奈川ながわに駕籠かごの西にしおお漢かんハ出で

来きませんの **四** 否いや止と安産やすうとられ

ら急いても取とり **四** 一分二朱いちぶんにしゆ下急げきう

で急いましをら **四** 蠢漢ぶんかん始はじめて駕籠かご

二 棄やーめいー 無件ろと言

れ 旦那も 或是も 遠者たうら

或歩行 ぬさる 或積た 罍 其様

事不 法仰と 何卒 罍 うるさいモウ

つけぬいと 言たう 罍 其振ら 何

位 ぬら 檀那 寫交 或座い 申上工、

旦那 罍 尤様さ一 分位 ぬら 兼 罍

滅法 界も 其 其 余だ 旦那

其 振ら 易行 るもん ぢや 有ません

罍 行ぬ けりや 恰く 此方 迄 止 罍

エ、思断て神奈川迄遣ませり今

日ハ仕事ことのドウセ溢あふだ 酒代さけ

え無なだが宜よろこの 宜よろあま座ざいま

よこのアノオ左場さば無なに骨折こっま

したなら一ひとつ盃はち買かて法下はつだ 其そのも

や骨折こっ次つぎ榮えいヨ併あ餘よ計けいハ災さいる

出だせぬいぞ少ま許このるハ心付こころを

しよ〜 五い 雞けいを座ざい ちんサア

お急いそれさいま 五い 喜き三さん郎らう手て

あも癩かたらう 駕かの親おやと取とが宜よろ

● へい恰二挺海産いあはてころら

戴て繋て糸ませく ● 夫ライ駕か

籠や沖奈川の旅店ハ何方の

一番郎 ● 夫擲て海産いるを

下田屋と新田屋の一番宜委

海産いころら ● 卒左様か何方でも

宜於よ為よく駕籠を其処へ

着てらんや ● 夫擲那様方海産

て海産いころら私方へ海

泊法下く新田屋で海産い

やうきとあ 疎おと申上まうせん **益**

手あ 宿引ひきの 已等おのうア 何時いつ下田くだだ

屋へ泊とまりんだら いけれい **益**で

もあ 産ういませう の 今いま 暇ひまを 旦たん

下くだ方かたへ 弘ひろ仰おほ付つけ 弘ひろ下くだまうと 振ふるよ

何なに卒そつ 災わざる あに 廉れん末まつに 仕つかやうん

から 何なに卒そつ ヲイ 駕籠かご屋やさん 何なに卒そつ

檀だん那なへ 弘ひろ勸すす 弘ひろ下くだれ **益** 主家おや共ども

まの あれい 徒いただ 旦たん那な方かたハ 下田くだだ屋や

この 脚定あしぢやう 宿しゆくた ころら

第十九章

一 檀那様あ着たを是く下女以濯

此湯を携て来ニヲイ若衆旦

那此草鞋掛と我等此と一所

子仕あて置てくんれ然兩

掛を座あへ直に三へイく唯今

運送まうと旦那お悪あ座敷も

あ二階の塞て居まうとわら下れ

がの上段れるに絞ませる四

其わら互わら一寸とくた物で

一口出るに呉五七のハ颯ハで何

も出来ませんでお悪くはな

いすに六有合れ物で宜然而は

膳も過七はあして貫度七は鉋子

ハモウ止ては膳を持て参りた

今夜ハ一向ハ構り上りせん

甚八大ハは世話に成り序は

茶を出して呉九ハイハ只今

是十中ハ奇麗ハ家は

随分行届だ十一た指で

あゝ産いませと料理なごもトシカ氣

の利てつ寧であ産いませと

黄花のあ来ませと

つ置て船を撒て呉れ

あ中々宜茶であ産いませと実よ

道中ハ東海道よ限ませと

も宜あ産いませとの

ご参ませとた

程歩行たせとの草卧た何率一

撮で呉れ

春秋 會言集 十九

去之^こ之^こ安^あ撫^ふを如何^{いか}だ^だ **世** イエ私^し

ハ止^とめ^めせ^せ **世** 左^さ様^さの^の其^{その}ぢや^{ぢや} 按^あ

摩^ま子^し錢^{せん}を^を坐^やて^てらん^んれ **世** タイ^{たい} 按^あ

摩^ま何^{いか}程^らだ **世** 二^{ふた}百^{ひゃく}文^{ぶん} 下^げ **世** 其^{その}や

高^{たか}料^{りょう} 少^{せう}許^{きょ} 撮^とで^で 如^{いか}何^なだ^だ 百^{ひゃく}五^ご十^{じゅう}

よ負^おろ **世** 惟^{ただ}く^く 喜^き三^{さん}郎^{らう} 其^{その}振^{しん}事^じ

不^ふ言^{ごん}と^と遣^やが^が 宜^い **世** 舌^{ぜつ}笑^{ぎょう} 談^{だん}で^で

座^ざの^の中^{ちゆう}に^に **世** ヘイ^{へい}私^しの^の宿^{しゆく} 彼^か人^{にん}で^で

座^ざの^の中^{ちゆう}に^に **世** 檀^{だん}那^な様^{さむらい} 方^{かた}も^も 昇^{のぼ}り^りで^で

座^ざの^の中^{ちゆう}に^に **世** 隙^{ひま}で^で 座^ざの^の中^{ちゆう}に^に

世 昇たご何だ 世 宿帳一海姓名

を録まよと 世 何の某某の家

來一人だ 世 宜安西座いよと 就

てハ筆墨代を海一人あ四文宛

戴まよと 世 時よ 轟三郎明朝早

のら今 唳モウ寐ヨウ 世 互安海

座いよと 一イ妹さん床を取

てらま 世 一イ何方に方をあ

枕よ被まよと 世 南枕の良是六

分枕紙が汚て居のら取替

て然る今些蒲團を貸て吳今

夜ハ餘程寧ろくだ 堂 行燈の油

このや成た 禁 唯今強もよ 世 水

朝 子左ころら 其積で 頼ゼ 焚 へい

河 機 燻 能 ぬ 休 法 成 ち 日

形 唯々六時を撞ちた ぬ 目 覺

遊 ち せ 平 ア、ぬむい 擡 ぬ 起 ぬ

成 ち 一 モウ六時で ぬ 産 ぬ ぬ

オヤ 危 採 ぬ 透 許 寐 忘 ぬ ぬ

ぬ ぬ 湯 ぬ 取 ぬ ぬ ぬ 旅

籠こも何程なんぢやうだ 罍たいあ一人ひとり前まへ一分いちぶ二

朱しゆであ産うぶいまと 罍たいヲイ亭てい主しゆ是これ

ぢや何なんぢや勘かん定ぢやうぶ違ちがだららぢ茲これの

上じやう旅りよ籠この 罍たいへイ一ひと體たいは諸しよ色しきぶ

高たか直ちゆう故こ必かならずあらよりハ旅りよ籠こも解と

禮らい上あがて居ゐまはと 罍たい雖なほ然しか惟これハはる遠とほ

だら併ひら夫とももぢぢ振ふるの家うち許ゆる

如ごと斯ごと諸しよ色しきぶの言こと盡つれの何なん処ぢよの

宿しゆくでももばば採と事じハは罍たい 罍たいオヤ大おほ

は茲これハトとン必かならず過あや失まち致しました恐おそ

入りて海陸いさよと全書違で

何も是知何共申譯の海陸いさよ

らん(五)夫見ろ併間違ら夫デマ

速書直て来い(五)へイ只今ハ大

よハヤ虫速て糸よ〜た(五)夫

勘定渡を草鞋掛を虫〜てらん

れ直よ(五)左様ゆら海

機嫌能(五)今日ハ海昼休ハ何処

よ致(五)藤澤の善らう

(五)友は中納言様のあ小休よ

成なりすなりににやや混まじまりりてていいけけるる

ままいい ⑤ 其その様ようのの先さきのの百ひゃくのの

百ひゃくののままりり ⑥ 大たい造ぞうれれんん數すう

だだ上じやう下げ幾いく人にんだだらら ⑦ マまアあ彼かれ是これ

二に百ひゃく人にん位ぐらゐででああららばばいいまませせ ⑧ 何なに

かかはは藩はん士しだだのの供くわ断だんをを為なしてして斬きるれれ

たたととのの語ごがが實じつのの ⑨ 卒そつ業ぎやうででああららばば

いいままはは酒さけはは酔よううてて居いたたささららででししてて

夫それはは何なにのの酒さけ舌したのの揺ゆりりとと見みええ

ししてて ⑩ 左さ様さまのの併あひ可か愛あいささららなな

ふを〜た然さ而しあ掛かの人ひと且かつハ如ごと

何〜た大造た後ごたさうだ空後ご

に鬼おにえままとと呼よ々々人ひと且かつ何なにと為な

て居ゐて空唯ただ今いま中ちゆう鞋げをか買かて居ゐま

〜た空人ひと足あし彼あ処そこで混ご雑ざつさる

のハ何なんだ空彼かれハ人ひと且かつハが其そのを附つ

替か為ゐのであ産うつまと空道みち中ちゆうと夫それ

の面めん倒たうつて困こ却しかナア

第廿章

一 従したが是こ漢かん字じをあ学ま子ごと成なる附つ

て昨日字典を未^ままして持^もて

糸^{いと}とま^ました。この是^{これ}でけ^けと^と ① だつて

未^ま引^ひ様^{さま}も氷^{こおり}解^とま^ません^のの^の ② 何^{なに}

引^ひの^のハ造^{つく}作^さも有^あま^ま多^たん夫^{それ}を先^ま

教^{おし}て上^あま^ませ^せ。此^こ字^じ引^ひの^の總^{そう}目^{もく}と

云^い物^{もの}を先^ま御^ご覽^{らん}成^{なり}此^こ通^{とお}れ物^{もの}で

總^{そう}て字^じと云^い物^{もの}の源^{げん}是^{これ}を組^あ合^あて持^も

た物^{もの}で^で其^{その}故^こ能^のハ順^{じゆん}を覺^{おぼ}てさ^さ

居^ゐハ何^{なに}振^は字^じでも直^ちま^ま引^ひま^ま道^{みち}

理^りで^で ④ 二^に様^{よう}に書^かて有^あ振^はに魁^{けい}

えやうのこが譯の **五** 片方四角な
 様に見るのハ角文字と申す
 亦真或ハ階書とも云ふと後の
 ハ草或ハ艸書共申して此書採ハ
 段々ハ崩て色々有産いす
 亦

行書と言物ハ真と草との間の
 物で **六** 成程然而見れハ何両方
 認て知れくらちや成すとい **七**
 尤採さ先真ハ原では産の
 不断ハ若くを重し用ひ

つら 総て皆あ学ば成ぬいぢや能

せん 八 夫ぢや引様を何卒 九

左様ぢやう今教て獻ませう 借此

総目ハ凡二百十四文字あ座いよと

其内ハ何偏或ハ何冠もこの何

構等と云物のが有て総ての字ハ

夫々何も偏と言物この冠と云物の

ハ属して居まよこの夫ハ属して

居想の偏等を持て引んで譬

ハ此字ハ脇ハ人偏と云物このあ座

いすせし 宜^{よし}あ^あ産^うつ^つま^まと^との^のは^は字^じを
 引^ひう^うと^と思^{おも}時^{とき}ハ^ハ此^こイ^イの^の部^ぶニ^ニ属^{ぞく}し
 て^て居^ゐ文^{ぶん}字^じレ^レ内^{うち}を^を搜^たバ^バ急^き度^ど有^あり
 且^{かつ}皆^{みな}此^こ理^り屈^{くつ}で^でと^とめ^めら^ら何^どの^の字^じで
 も^も其^{その}部^ぶを^を引^ひて^て尋^{たづ}ね^ねれ^れバ^バ必^{かな}氷^こ解^げ

ま^まよ^よと^とも^も解^と悪^くい^い時^{とき}ハ^ハ康^{かう}熙^き
 字^じ典^{てん}と^と言^い支^し那^なの^の字^じ引^ひレ^レ始^はニ^ニ然^{ぜん}
 此^こ類^{るい}の^の字^じを^を聚^あつ^つた^たの^のと^とあ^あ覧^{らん}せ^せ成^{なる}
 の^の宜^{よし}筆^{ひつ}畫^がを^を筭^{さん}て^て引^ひて^て見^みれ^れバ
 何^{なに}偏^{へん}或^{ある}ハ^ハ何^{なに}冠^{かん}ニ^ニ属^{ぞく}し^して^て居^ゐと^と云^いふ

るの委細書てあ産ソのよとから ①

艸書も矢張然云風よ引んであ

産いあよとこの ② 先考あも大解

偏冠の當ハ自然知るもので

のら其知と以て引けば氷解ま

せこの中にハ知れ兼る字も多有

まよとから然言時よハ別よ引様の

サ故文字ハ明人よ聞より仕方

以産いあせん ③ 何も大變よ六ヶ

あな学問だ是者何 ④ 何別よ煩

煥事ハ海陸ソヤヤン 勉強次第で

よ **④** 字引を見るよ 脇子假名

が休て居又下よも記て有まよこの

ハ **⑤** 脇子書たのハ音と言まよ是

ハ大体二有まよ漢音と吳音と

言まよこの夫ハ漢の國吳の國と申

よ支那の西國の読様でよ **⑥** 方今

てよ支那でハ矢張如此讀まよこの

⑦ イ、エ是ハ極古の読様でよ唯今

此讀声ハ唐韻と云まよ **⑧** 然る下

書たのハ **夫** 夫ハ訓と詔まは是

も日本語で其字の意味を譯

したもんで同ト字で意味が

幾箇も有まはら訓え色々々

あ座いすは **世** 此字の角ハ圓を

附たのハ何云詔でこの **世** 夫ハ平

仄を印た物で平仄ハ因て意

味の違ハ字のあ座いすはの

躰平仄と云物ハ不断不用物で

唯詩を作時の之用まは **世**

此字とけ字とを引て見たる有

ません 是ハ俗字其ハ古字

は字ハ音ハ何讀まは 夫ハ

方で出来た字で音を平仄も

あまらん 其ハ字ハ幾等引て

あやいせんお 夫ハ如此字

の略でと 其畧とハ 其餘畫の數

の多て煩むら少して書た物

てと 一射支那の文字ハ權

輿ハ其始ハ何から成た物でお

瘞いしつたの世支那の蒼頡と
 言人の鳥の脚跡を慰て始て
 文字を拵たとハ云まよとの何そ
 信られせん夫よ然て如此云
 嘯の者まよとテ彼れ蒼頡と云

人の字を拵たら鬼等の文字と
 云調法物物の世の中に出来たら
 此から鬼れ為所業を人間に知れ
 て種々の事を書るだらうと言て
 哭まよたとの云まよ天での文字と

言物の本末たら人間もたゞく慧
 舖利口に許萬事開過て肝心の
 質朴と云所が失て仕意よハ
 困却だらうと言て粟を降く
 たと云事の有まよと支那で

兎角如此云空な事を好云まよと
 數の多物をゆく一人の所業で何
 して友扱出末まよと物の最初品
 物に形を執て聊覺に印よ書
 附た物が段々よ後から出来て

来た物だらうと思ふやに **世** 何様
 成程併悉像を書いた物許でえ
 両座いすやとよの耽と無形物或ハ所
 爲此類も如何 **世** 夫も大方何
 この其状は原或も其理は因て

書をせし譬バひびがしと言東の字ハ
 木の蔭より日の昇る状を表し
 あきらめと明此字ハ日月の二
 を合て造るくくと聞の字ハ門
 構は取と字と書又かくと

公書の字ハ筆の下ニ曰を書
 いた採ぬる類で其原ハ皆**世**是迄
 ハ平假名を習て居りたふ
 手習師匠の申ハ夫を止てま
 書を学んだが宜らくと申すはが

如何であやうせし **世** 何言流儀
 を学ば成積 **世** 何云流儀
 併し虫の書方をも亦色々有るに
 のの **世** 有るもの有るもの
世 否全一物と心得て居りた

④ 唐様と俗採と二つ産つて
 南極ハ清朝の書採を真似た
 物で、俗採ハ亦幾色も有る
 之の其内ハ漢家流と云のを
 一番能くと為り、政府で用る

書法で全日本人の發明為た流
 採だ、之で、
 ④ 何れ西國の學問
 ハ大變入り、採だ物で何れ腰の曲
 せで學でも所詮覺盡せり、
 ④ イエマサカ其様ハ煩懊物で

色あ産いません本氣に成て執者
古さへ為れを何でも無事にて

第廿一章

一 今日あ引合申度事ハ外で
もあ産いませんが先日
の書籍

下粗々中入りした通いと申我

國の商人が貴国に商人と取引

約条違の事な付ての訴訟一件で

あ産いません 二 ヲ、米程夫ハ慥湊

屋濱右衛門と貴國の事、此事

で流産いぢりたる。 ③ 九折で

少産つまじ書翰を添て 益るる者

置た約条をの字をを覧ニおれ

バ委細分明もまごの羽毛一端ニ

付る洋銀十八枚替の約条にて

即貴國の商人洋銀廿萬八千枚

を以て我國の商人は羽毛を買事

は取究りて儲其処で荷物引渡

れ義ハハハハと 高船の若次才十

日目と廿日目は半分宛引取

衆に固談判を遂たる事さうで
 あらざるやとテ然処其節羽毛のお
 場に至て好む猶其上も上想れ
 景氣で有た事故當人も随分
 儲見込で買込し知却而直の下

落してもしやれん月に至る十六枚
 一々買入の無佐れ相場も成たる
 故殆當人も困却極て頻に勘辨の
 故を頼へたる処固より物象遠のる
 故荷主も承知彼れいり付事六々

雜言 會言 十一卷

爰お成終る我が此役所一訴訟

て出ました地を渡すいまよと成

程遂一承知終ました併只今仰れ

趣と商人の申しとハ此二違まよと振

は覺まよとあせまよお成まよした約

条は横文に事程承まよした通商船

の着ての上まよと書て有趣まよ見えま

よけれども商人の申まよは此も老振

れ訳でん事全六十日の日教限と約

束波まよした處時過て漸七十六日目

春秋 會言 十一卷 六十一

至て舟の入港致す一たろて
 して全躰期限通に渡さ一為れ
 よ一や損に成るも辞應ぬく引取
 積で有たとゆ人かられ申述でぬ
 度いゆと五併當人ハ左指中たで

毛をせうけまども夫ハ何を此
 信とられません事でも其沃を自
 分ハ印を押して有物あまが正敷
 乍有其指れぬ説でハ一向首尾と
 成りせん夫も餘異からん事このと

思おもひまゝに核こゝろ文字あざなとハ申まを物ものの一いち二三さん
 の数字じすう丈ただ位ばいれ事ことハ商たう地ちの高あき人じん
 ハ皆みな覺おぼて居ゐぬいるるが何なんを有ありま
 せしや六ろく十じゅう日にちと書かて有ありま無なしのを
 其その場ばで直ちよく咎とが想しやうれ物ものぢやありませ

人ひとの六む成じやう程ぢやう大たいは乍あ然ぜん貴たか國くにの高たか商あき
 人ひとハは國くにでは總すべて正せう直ぢよくれ者ものだと
 辨わ別べつ氣きを緩ゆるて居ゐ居ゐ故ゆゑ其その極たぎ事ことは
 氣きの倣なれかつたか心こゝろを知しらせんノサ
 仰おほのせ様やうは唯ただ一いつ通つうの理り屈くつ斗たうでも

是非を糾譯にま行まのまよひ 七

左招さやう 仰おほして見みと何なにの我國わがくにの商人あきんど

許まかりの非道ひどうどい招までまよの正直せうぢき

不ふ正せう整ちやうを明あき白らうよ論ろんどる日ひもえ

日本にほんに商人あきんども餘あま評ひやう判はんの格かく別べつ宜よろ

後い方かたでも有ありまよい夫それハ甚た其その意い

を得えれい事ことどい約やく条じょう書しよの證せう知ち

だうら口くち上じやうでハ何なにれを言いつて

も取とりハ豆たり中ちゆうせん併ひやう貴き國こくでハ

書かいた物ものよりハ口くちで言いた方かたを却かへつて

證処しやうにこはあ採しゆ成せいすらはのののハイエ

弊へいて何しして唯今いまも申た通其その

処こより理屈くつ外のの意味いあひも有すい

りんでも形かたちのりら退て猶會かい議ぎの

上う九く何なにに處置ち振はりは成なりの其其その

災さい敵てきの処をお速すみに何卒そつ十じゆ何なにを

處しよ處ちよの附やうの煩懊ぼんと存すと

人ひとのり又また苦く情じやうを言立たて向へ

差さ入いた五百ひゃく枚まいの打金うちを何でも

返かへて貫たいと云て居ると也十

夫ハ何モ無理な埒も無い話だ
 其様れ事ハ固より貴國でも
 其聞入り成答も有るやあ
 勿論聴取は済むが其其
 以何しても論が干渉せん
 破断しなら宜らうと商人を
 内金を其儘うつけやして置て
 談付ましてハ如何也イ、エさ
 言採れ處置振でハ此方での
 承知お出来ません内金を

春秋會話篇
 十一卷
 六十五

損^{そん}し^して仕^あ荷^か沃^くぬら^らば最^{さい}初^{しょ}
 約^{やく}条^{てい}し^した先^{せん}達^{たつ}ての直^{ちき}段^{だん}よ
 今日^{こんにち}の相^{さう}場^ばを差^さ引^ひて償^{つひ}金^{きん}を
 了^ま拂^らぬら^らちや成^ならん道^{どう}理^りで
 是^{こゝ}併^あ此^{こゝ}がでい其^そ採^{さい}れ事^{こと}ハ固^か
 より願^{ねが}ま^ません南^{なん}時^じ餘^{あま}羽^う毛^{もう}は

買^か手^てのサ^さに付^つ是^{こゝ}非^ひとも引^ひ
 取^とて貫^ぬぬくつちや成^なま^ません
 夫^そハ何^{なに}も六^むヶ^があ^あら^らうと思^{おも}ま
 是^{こゝ}餘^{あま}残^{ざん}忍^{しの}ぶ^ぶで^で是^{こゝ}左^さ振^{しん}ぬ^ぬ

日よハ商人の身上が潰れて仕
 高ませるのら **五** 潰ても互沃ぢや
 高座いませんこの固より引負この
 拂きれつ附を潰るのて勿論の
 事でせし則 **五** 國の商法と云

物でとマア私等比考ぢや彼類
 の山師商を為族ハ皆潰て互道
 理のと思ませ **六** ハア皆潰たら
 大變の事です **七** 左様しる附
 よハ当地の交易が直よサ放て

仕舞や為りせんこのシラ併何一

ろ些捌の面倒でよめらモウ一

度ぬ人めら貴君の方此商人

一示談致さして見たら何でよ

夫で迎も勘辨が虫来れけきバ

其時さ何のよこ片れ附採も

有りせしめら **七** 畢竟示談の

調ハぬの故よこを無據の事件よ

推轉訳でよめら此上ハ徒れ事で

よよ〜や致ても所詮承知為人の

勿論れりと思ふと兎も角何只

公平れあ処置を願より外ハ有ま

せん必今日より三日の内は是非

決断がせければ何此方で

又取津振もあ産いまもと **大** 今一

度何取糾の上夫逆よハ心

第廿二章

一 春を心持が何と可宜あ産つま

二 自然と氣が引立て陽氣よ

三 追々暖子成りよ **四** 今

日等ハ裕を着ても宜位でと五

併未餘寒の嚴爰有産のますと

六今朝程等の寒中の操で流

産のますと七朝晩ハ来産の産

いもうとが晝間ハ餘程凌能成

ま〜とと八産と申ても春ハ

表文何〜ても違〜と九ア、長

閑れ日だ十實ニ能時候ニ成

また十一コレ其処の章子を明

れいの大分蒸が為て来た十一才

ヤ外ハ日ひの當あつらて居をりまゝには流ながる風かぜ

の南みなみには寝かたと見みえましては **三**

大たい分ぶんはは暖あたたかました **四** 漸や々や時とき

候か相あ應うまは **五** 未ま何なにも朝あ晩ばんハ冷ひや

つときまうまにはナア **六** 時とき候かが未ま免と

角かく定さだませんでまし **七** 寒か氣きをは緩ゆるま

した **八** 併あひありし時とき候かがは時とき儀ぎでは

産うまいましては **九** 大おはは暑あくました

世 今いま季きの夏なつハ凌しの悪あくまでは産う

いままして **世** 何なにも如かしあるまつまや実じつは

堪兼やすらに世加あ之ま子こ此こ二ふた三さん日にちハ風かぜ

のち此こ二ふたももほひくく産ういません 世如何いかんでん

はあ暑あつささハ随ま分ぶんああ弱じやくでん産ういま

せく 世如何いかんもも堪こらられません

世非道ひどう暑あつささで困こ却げまま 世共とも少ち々々

夕ゆふ立たでもも糸いとバ宜よろああ産ういま 世の報ほう

道照どうしやう込こぢぢやや産ういま 世の地面ぢめん

がた大たい分ぶん干かん割げまま 世たた処ところががあり

ちちのの 世暑あつささにに負まかか 世たたのの

てて気き分ぶんのの勝ま 世まま 世何なんももハハヤ

夫ハマア海大事ノ大分暑

中ノ流行怒で之**堯**暑ノ入

て格別凌難ク海座いま一

ほ振子を窺**世**至極何も暑

るで之併尊君ハ何時も健

で能く之を尋ね下りたる途

中を無心暑海座いまたるマア

海肌でも海脱社成て**世**大分暑

も凌能成て象ました**世**暑とヤリ

つと風がモウ秋たから土用中

の採れ事ハ海産イナせん 世ア、

涼い風が吹まると 世 暑さも大

さよ樂よ成た採であ産イナ 世

風の音が何と鳴くモウ秋の々々

さよ成すした 世 昨日迄ハ風も

れく誠よ暑あ産イナ 世

世 嚴あ残暑であ産イナ 世 残

暑ハ邪て凌悪い物であ産イナ

世 俄よ涼あ成すした 世 夜分れ

そハ此三涼る振でイナ 世 一昨

日側迫ハ彼操子暑あ瘧いりた
 のよ今日ハ亦餘冷気ゆりて事何
 して俄ヨ如けりての 罍 如何ヨ
 も悪い季候であ瘧いゆりて 罍 目切
 と涼あぬまう 罍 忽寒成想

てりて 罍 今朝程ハ餘程あ瘧い
 ゆりて 罍 餘手且ハ爪痛成りた
 罍 氷道寒トゆりて 罍 モウ日々
 多きよ推轉ゆりて 罍 次第ヨ室さ
 ぐ募ゆりて 罍 是から段々成り

で行ませんモウ五増々増々寒さむつる

ぞと併併程程れく寒さむの入入りせる

如か此こでああ産ざいいちちせせる五今朝けさ

の寒さむさは何なにでああ産ざいいすすた五

イヤモウ起おて手てを洗あ事ことも出で来来

まませんでたた水みづ鉢はちれれ多たかか全ぜんで

氷こおり着つて仕し舞まて石いしで擲なても何なに

ても為な指さが有ありませんでああ産ざいいちち

た五寒さむいいので火ひれ側はたア離はなてハ実じつは

居ゐれません五年としを取とりてハモウ若わか

い者と違つて猶更友採りて **毛**

指の憔悴で筆の擽りせん **典**

尊君ハ餘勉強過る此火鉢であ

手とあ烘成 **弄** 能貴君ハあ手

爪痛あ座いません子工 **卒** イ工自

分の手だあ何だの覚のす指りて

其でも中くや事よ向つらや居ら

れよせんあ覽の通り急の用で

わら **六** 寒よ入りて別して **最**

あ事であ燈いませ併何

此字その所障も仕入りせんて

難有可程いふと所尊宅でも皆様

所変成たるも仕在りせん

で誠は儲當冬に此は實は近

親に覺りせん 空 左指ぬら随分

空と所厭成りて 益 私方

らハ未だ中のあるも上りせん

で甚洩りせん所宅一宜也 空 日

餘程迫り参りた 空 其代夜ハ寐

飽程長成りた 空 モハヤ日ハ長

い頂上ていしやうであ産ざいせうせう三實じつは朝あさ

の事ことを忘わすれる程ほどに長ながくあ産ざいま

よと今日けふも登のぼ寐ねを二ふた寐ね入い作し終は

ましたの未まいの首くび想おもいも為なま

せん充誠まことは月つき迫おそ仕つかましてあ産ざ

いちやうとして辛急いそハヤあ事こと多おほういら

つしやいちせう七年としは暮くれで噓

あひ繁さかん用もちであ産ざいせう三非ひ道ちゆう

押おし諾つちかりた定さだめてあい急いそからい三世せ

話わあいれであた歳せい暮くれはを参まがり上ま

春秋會話篇

廿三章

八十一

せんで甚相濟まことせんまこと ⑤ イエモウ

あ察みし申まをすに態々まごころハ決きして

あ新あらたなりなりと ⑥ 何なに年とし越こしてあ

ああいいせせく ⑦ 尤なほ様さまさ節せち分ぶんハ慥たし

廿八日にじゅうはちにち傍わらわたと思おもうたの閑ひま

此こゝで忘わすれれたコレ誰たれの曆こゝろを

持もて来こい

第廿三章

① 今日けふハ能よく快たの晴は致いたした ②

左ひだり様さまでけけと誠まことニ踏ふみみられられれ天氣あまで

三 兎角變易い天気で何を 四 今

日も天氣ハ六ヶ変様でらこの 五

此天氣ハ持直そのせうこの如何

でせう 六 尤振サ請合そのせん

子工 七 空の大明く成て参

また 八 多分天氣ハ上そのせう 九

能天氣で何産いそのと 十 珍象よく

晴また 十一 今日も快晴で何産い

また 十二 能天氣の流そのと 十三 誠よ

變易天氣でハヤ 十四 今朝の振子

でハトシダ能天気よであ産ざいまうう

たお **五** 今日けふハあ些ち風かぜをまうらした **六**

併あ風かぜ故ゆゑのあ天気きはありまうらしてあはま

七 悪あく風かぜであ産ざいまりまりま **八** 夫おはありま

濕しづかずきまいまりまのあ非道ひどう埃あはであ外そとハあ歩あ

行いきません **九** 風かぜもあ何なに風かぜであ産ざいま

せう **世** 富士ふじ南みなみにありまりまであ産ざいまりま **世**

異いつらんあ寒さむいあ風かぜであ産ざいまりま **世** 風かぜ

のあセイせいのあ餘程よほど冷ひやまり **世** 風かぜのあ

まりまり **世** 西風にしはあ成なりまりま

でやや座ざいいののよよとと **世** 才さいヤヤ貴き君くんハハ何なに

からからへへはは非ひ道どう風ふうヲヲ **世** イイヤヤ強つよ風ふうでで

何なにもも一いち寸すん日に本ほん橋はしの方かたまでまで餘よ城ぎ

れれいい事ことでで尊あやむ君くんもも何なに処ところ迄まで是こゝらら

世 私わたくしハハ追お風かぜでで左ひだり様さまでもでも有ありませ

んんのの貴あやむ君くんハハ相あひ悪う向むか風かぜでで大おほ変へんでで出で

居ゐるるににナナアア **世** イイエエ何なにもも仕つか方かたがが何なに

座ざハハ中ちゆうせんせん **世** ママアア風かぜのの寒さむいい事こと **世**

私わたくしハハ風かぜとと引ひいたいた想おもでで幾いく等とうななまま者ものしてして

ここももソソククくく波なみののよよとと **世** 烈はげいい風かぜででやや座ざ

いふこと **世** 左採嵐ささめに成なりて来きらう

できと **世** 交まじりて参まゐりし **世** 雨あめ

ハ際まじりし **世** 如何いかに産うまひし

世 左採ささめできと子こ工こ大だい分ぶん雲くもがが出で

て参まゐりし **世** 併ありて強きやう事ことハ

有ありし **世** 思おもひし **世** 扱さつ頃ころ

何なにの何なにも日ひ々々困こ却けつし **世** 天てん

文ぶんでハヤ **世** 梅うめ雨あめ中なかとハ申まし

能よ降くだりし **世** 何なにと何なに

時ときマア晴はるる **世** 産うまひし

春秋會話篇

廿三章

八十四

世 尤様でと何時止るやラ月

初めから雲切の空も見えませ

ん 能如此マア 止るよ

連陰続た物でと 殆天の底で

を脱たのと思ふ 揃よ一向晴る

この有せん 平ハア大よ 何様を揃

思ハ能如此雨水を天上へ貯た物

たと思揃よ 盡ぬのりてと 何程降

ても 昨日日記を繰て見よ

たら先月廿二日 降初

たんでと ㊦へ、エ九揃でよその文

ぢや成程頓てモウ五十日ばかり

際まよとナア ㊦友指てと昨日で

丁度四十八日よ成まよと ㊦ハ、ア夫

てと今日ハ四十九日で明日ハ忌

明よ附月代を剃訳だぬハ、ア途方

よ ㊦違 ㊦是ヤ ㊦併縁起でも

㊦ ㊦実よ雨垂の音許毎日聞飽

ました夫よ一寸其処へ出るにを

道よ滑てモウ誠よ虫這入の才

ツクウで 罌 ヤアモウ道みちが悪わるて

然さ而し加ま之けは 彼あ処それ通とれ道みちハ又また

出で水みづで堀ほりが開ひらいたと見みえてモウ

皆みな往い来きの人ひとハ川か越この振びでハヤ

罌 家か宅たくハ西さい普ぷ請しんが新あたらしく西さい産さんい

まうとやら如か此こ際さいても心こ配はいハ西さい産さん

いせせんが手てあ宅たく等らうハ古ふる家いれせ

ワの〜と彼あ処そ是こ処こが漏もて不か叶れん

昨きのう晚ばん等らうハ下くだ度と卧ふて居ゐ上うの漏も

初はじめも〜とイヤモウ夜よ中ちゆうハ蚊か帳やを

釣替るヤラ疊を揚るヤラ殆騷

でい産いすうた **兎** ハーア夫ヤ何

もトシダイヤ如此降の長と兎

兎左拍でよとヨ私宅い未家根の

左程古くいれいのでい産いすうたが

自然とあるが廻ると見えすて次の

るれ鴨居柱等のが濡て居す **幸** 如

此降の續すよと何回ら彼迄一

躰り濕布い指で識る気味が悪

くつて何も **五** 今朝程些調物の

春秋

會言

廿三章

八十一

有ありまゝして庫くらの隅すみに仕つか籠かご込こんで

置おきまゝした本ほんを出だして見みま

たら皆みな表ひら紙しが矇くらたらけで

あ産うぶいまゝした五時ときは梅うめあひ

何なに時とき明あるであ産うぶいま五せ

左ひだり揃そろでまゝモウ程ほどは有ありまゝにまゝい

入いれ梅うめあけの儘まま五六日ごろうにちの内うちだと思おもひ

まゝた

第廿四章

一 能よあ湯ゆであ産うぶいま二滅めす

結構けりこれ夕立ゆふぐちでと是これで大おほき扶たすま

以も三さん是これ誰だれの雨あま戸とを少すく楯たてれい

の斜しや面めんで縁えん側がわも何なにも太おほ変へんだ

四よ才さいヤ障しょう子こ追おひ此こ様さまは濡ぬれ

是こゝはヤマア併あ能よ夕立ゆふぐちでとあ産うま

いいちちやア電でんけ非ひ道どうる五ご祈いの雨これ

驗けんが利きたと見みえて思おも掛かれい十じゅう分ぶん

れ夕立ゆふぐちでと六ろく不ふ思し議ぎれもん

でと神かみハ簾すだ未まは出で来きるせん此こ

あちや百ひやく姓せいも息いきを衝つきせと七しち

大分たいぶんゴロツキごろつきのの八はち成なり程ほど大だい炮ぱう

の音ねこのこのと思おもつて居ゐまゝまゝたらたら雷かみゆ

でではは煙えんののナアな九く雷らいのの枝えだま

とと併ひら是こゝで涼すずああ成なりまませせうう十じ左さ

搦なででげげとと氷こ道みち蒸むと思おもままゝゝたらたら

トウとくく遣やてて参まままゝゝたた土つち挂かせせうう

このこのナアな些ち夕ゆふ立たがが有あれれバば宜よろししいいまま

とと土つち大だい分ぶん雲うをを揚あげげてて参まままゝゝたた

ととヤアや西せいののががれれ空そらがが真ま暗くらいい事こと

とと由よし彼あ方ほうれれががハは頻しき々々今いま降くだりりてて居ゐるる

見えぬものにて **五** 才ヤ電 **六** 彼方れ

空れ恐怖事彼黒雲をみ覧法

七 雷鳴の致すものにて **八** 是で梅

面も明すせし誠は長階でい

いま〜た **九** 唯今れ雷ハ何で〜

た **世** 實は魂消す〜て〜何でも

直近呀〜降れ〜つたよ遠

産いません **世** 尊君ハ雷ハ至て

嫌れ方では居るものにて **世** 世の

諺は地震雷田禄親父と云ふものにて

私ハ雷様が一つ番怖畏おそぬ産ういすまと

世せサア皆みな此この蚊帳かや中ちゆうへ這入こて

居ゐるの宜よろ線香せんかうを點つたの是これ雷除らいじゆ

の御守おみまもりを何なにした其その様ようは周章あわやう

から却かへつて知しれぬのだ苗誰たれの

燈明あかりを點つて何なにの急いそぎは空そらが暗くらく

ぬてあ守まもりが猶なほ見みえぬヤア桑原くわがはら

く豊手て前まへ乾物けんぶつハ何なにした取と込こだ

の豊オヤ雷かみなり振ふるれ怖畏おそぬは夢む

中ちゆうにぬてトンダ事こと終はつた

是これ小こ増ぞう内うちにに旦たん那なのの海うみ跡あとにに
 途と中ちゆうののも知しれれ難がたから傘かさと持もちて
 其そ処こ迄まで海うみ迎むかふは往ゆてて来きてて吳ご札さ
 夫それ子こ雷かみなり振ふるのの鳴なりてて悉しつままふたから
 障さやのの強つう成じやうてて来き想きやうでで海うみ産うまいま

是これ海うみ笠かさと桐きり油あぶらはは絞しぼまませうこのの 堯ぎやう
 今いま朝あさハハ恐おそろろふふ霜しもでで是これ橋はしのの上うへも家や
 根ねのの底ひたも真ま白しろ 世よ成なり程ほど 衆しゆ柱ちゆうのの
 モウ非ひ道だうををままししてて是これからハハ霜しも
 解とでで山やまのの方かた迄までハハ道みちのの悪わるくく成なりて

行ゆもせん 世よ今朝けさ氷この張ちました

世よオヤ左さ振までるとこの寒さむい筈はずでお

産ういすよと 世よ今朝けさハ河かの一面いつめんは

氷こますくとと 世よ左さ採とでお産ういすよ

せう昨夜けさハ家うち内うちの中なかれ水みづ迫せま氷こ

ますくととら 世よ川かでも壕かでも一ひと躰た

よモウ氷この張ち詰ぢました 世よ今日け

ハ小こ供どもの池いの上うよ乗のて遊あそで

居をまのよと 世よ非ひ道ど氷この張ちました

世よ翻ひた水みづでも湯ゆでくと側そばから氷こ

氷こり附つきまうと何なんと非ひ道ど寒かんト揺やうでハ

有ありませんこの❶荒あらい何ど処このあでも氷つら柱はしら

の垂た下げぬい軒のき端はハああ煙えんいません❷

氷つら柱はしらの垂た下げ処ところを見みちや餘あま程ほど寒かん氣き

が烈たげあいと見みえまううと❸モウ程ほどれく

雪ゆきの階はしまません❹今いま朝あさ程ほど家や士しと見み

ままううたら真ま白しろでああ煙えんいまううた❺ヤア

月つき此こ影かげのし思おもつたら雪ゆきの階はして居ゐ

ままううと❻オヤ花はな採とむまの昨け晚べ彼あ

様さまと空そらの晴はれれて星ほしの階はし揺やうで有あう

たよマア思おもひへ寄よれいい **罍** 何なんと能よ

降ふり雪ゆきであい産ざいまよい今こん日にちハ餘よ程り

積つまませし **罍** 雪ゆきも降ふ時ときも左ひだり

でもあい産ざいませんの後あとの又また道みちの

悪わるく成なて困こ却かままよいナア **罍** 東とう京きやう

よ為なてハ随ま分ぶんハヤ大おほ雪ゆきでした **罍** 今いま

年としハ雪ゆきハ珎かたまま二に尺じやく許ばも積つまました

様さまでし **罍** マア東とう京きやうでハ近きん年ねんよい

雪ゆきでしの私わが業わざハ國くに業わざでハはは換か

れ雪ゆきハ何なんとも思おもまませんの一いち犬いぬ餘ありあ

降つての有りたる家でも何れも皆
 埋て仕敷きよと外の往來の便で
 居家の家根より上り成りよか
 ら何処の家も内へ這入りハ殆ど
 の中へでも何れも様で此**辛**貴君

ハ越後れ高田邊で海出せ成りた
 つけ子エ夫ぢや尤越後の高田羽
 前れ尾花沢と云らや雪の降高
 名所でよとから成程**五**寒筈で此
 いちよとて雲の降て来りた**三**道理

春秋會話篇
 廿四章
 九十一

で寒さこの別であ産いすよ○香昨夜

ハ彼霰の音で眼の覚すよ○てから

寒いので夜明を染く不睡は仕廻

ま〜た○益夫は貴君の所宅ハ失

禮れぐら慥掃葺れあ振子でよ

から別〜て音の烈なあ産いすよ〜て

せ〜子工實は雨の際音を聞て卧て

居れハ寐んぬの宜物でよこの霰事ハ

ゾット為れい物もあ産いすよ○吾今朝

曙は霧を分て彼野原を遣て来ま

春秋會言篇

上巻

九十九

〜たら羽織ハ濕成袴ハ裾ハ草の

露でグツチヨラ濡て完了〜
た

成程釣の中ハ草の中ハ歩行させ

ん私も昨晩更て歩〜て着

物を夜露で全で濡〜た其

セイこの〜て今日ハ心持〜の悪〜

い〜

第廿五章

①初〜して沙意得〜の事知博と

申〜に幾久〜の懇意を願〜

古道真言であらば座いかにて兼て沙

高名ハ承居まゝたの不才今日ハ

偏ニ沙厚情を三未懸違ひして

漆々流るを得ませんで座の

した先始まゝて毎度悴が流世

話ニ預まると一寸あ礼儀がら四 決心

安う沙子息ハ朝暮失礼許申すに

能は出せ成まゝたマア流寛と五 初

てハヤ流目子掛まゝに何の流心あ六

私ハ不調法者であらば座の何分

七 私ハ言語同断太たでい産ざいまと

初はつカしてお顔かんを八 是これハ能よくそを

涉せつ等ら来らであ産ざいました私わたくしハ八月

朔しよく日にち稔しんとまりまとし以い来らい西せい點てんを

何なに分ぶん九 叔しやく段だん々々此こ度どハ涉せつ周しゆう旋せんれん坂ざ

を難あつ有づ仕し合あにい産ざいまとし十 一工行くわんぎやう

届とどちちで誠まことは併あ恐おそ悦えつはい産ざいま

した士し若わ貴き君きみハ落おち合あ久ひささんさんぢやぢ

産ざいまとし士し才さいヤ是こゝヤ不ふ思し識しれ

提た早はや見みさんさんでしたたつつけけナナ能よくそで

何目よ懸まゝた實よ久ぶりを
 何してマア貴君ハ^⑤何も似と様
 れお方だと思て夫故ヤレく能処
 で扱打強まゝて久くあ意得ま
 せん毎あ隆で先年ハ色々あ厚

息子頼まゝて^⑥い工私こそ何もあ
 禮ハ礼畫せせん其後使モ申べさ
 所処更子打怠慢文通も致せんで甚
 中沢もあ産いせせん儲當財ハ何方よ
^⑦才ヤ誰君あと思たら能マアあ珍

鳥渡河門前を通りて

何だ堅苦愛我等れ内へ

通ひ成ナ其様は改て他人ケる

大起でも近安中をも禮塔有

と云ふから起りて

セイあして敷居の高採で

能こそ心処一誠に見苦愛月で甚何

世左換水ら内免と蒙りて

扱是ハ餘失礼物で内産い

在所から到来致すたから世是

も何より物ものを難あや有が何なに産ういもと併あ

恐おそ入いりもと**世**是これハ餘あま糸いと末すえ何なに品しで何なに

産ういもと**世**何なにより結むす構かま何なに物ものを

併あ何なに死しの毒どく搦なれ**世**何なに免ま法ほう下した誠まこと

よ何なに草くさ沙さ法ほう殺ころすた**其**ヲ、何なに久ひさ

〜ゆりで能あたく〜とサア、是これハ私わたくしハ

如何いか成なりたのと案あんして居ゐるた能あた

の道みちを切きと振ふり些ちも何なに入いり

世借か僕わも近ちか日ひ大おほ坂さか辺へ近ちか發は且かつ殺ころ

も〜と統としてハ苗な守まも何なに家か丹に等ら

を何分何か其ソレハく何少用

で以度ハく又出立ハ何日頃

● 左揃でけま多分来月二三日

此頃ニ成ませく● 何時頃

其成りて● 用の辨れ次第直

立降積で此座ハく此の併其模

子因てハ来春ニ成ませく此の知れませ

ん● 世道中此大事に随分此機

強能● 世雜者此座ハく此左揃

ら何分君も折角此厭此成

して**曲**只今着被りたおちの

砌ハ段々雉有夫子留る中ハ何角

色々**莖**清道中恙水くして**誠**二目

お度心産いすこと**無**あ勞で産い

す〜たら〜**其**今日ハ些取急すこと

やら暇をやりすこと**何**又其力子**世**

折角清虫の処何の清愛相も産

産いすせんで甚**何**之**世**拙宅一

之些清**遊**子**第**何伺候すこと今

日ハ忽々**平**一寸虫す〜て色々

涉馳走を毎度上度は誠ニ也

産致もしては ㊦ マア宜ぬらや

何産いませんのモソツト何のイヤ

左換で何産いませんこの甚今日ハ

何忽々で何産いませんて是は

懲不成は又何卒何近い内は ㊧

是誰の御立は成ヨ何履を ㊨ イエ

モウ何構れく度々出ませんの ㊩

又其内は ㊪ 左換せら今日ハ何構

何せんでしたヤア相悪亦降

の強く成て来りしは能く支

度を貴君の御簾ハ餘程良品

では産いしは是ぢや何換れ

階でも雨ハ徹まりしは**哭**失敬で

げよこの其笠を何卒**哭**左換れ

ら**哭**日外此お沙巾よりた茶ハ甚

お忽々で申訳も此産いしせん**哭**

イヤ其節ハ色々何をも彼換れ

お構沙下ちや孟浪子忝上れ

せん今日ハ能くを此尋沙下

た併あひあひお悪あつ家か岡おのの留守るまであ産ぶ

いまして平此間このまハ途中ちゆうちゆうで甚失しんじつ

敬けい⑤イエ何致なにぢまして私わたしを併あひ

彼処あつれのら何方いづちへ入いりました

